

なければ、キノコは生き永らえることになる。それを裏付けるのが、三十年来、九十九里浜のクロマツの防風林の管理をしている長谷川三郎さんの話である。大正四年生まれ、一宮町東浪見の土地っ子だ。“もう二十五、六年も前でしたが、そのころは地引き網が盛んでしてね、ある日、浜に魚を分けてもらいに行つたが不漁で、空のバケツをさげて何の気なしにマツ林に入つたら、そこにハツタケ。そのうち、人が採りに行くようになり、いまじゃ耳から耳へと伝わりまして”入梅のころのアカハツタケ、秋のキシメジ、土地でアブチャチャというアミタケ、十月初旬の盛期には、暗いうちからキノコ採りの人たちが詰めかける。だれもが車で来る。毎年、

船橋からバスを仕立てて繰り込む常連もある。“秋のキノコは真夏の時に湿りが少ないと具合が悪いらしく、今年はちょっとダメでした。でも、減っているということはありません。キノコ採りの人たちが熊手のようなもので落ち葉をかく。あれでいいんでしょうかね”と長谷川さんは語った。植栽からの年数によるマツの若さもあろうが、都会で暮らす人々の自然志向やモータリゼーションが、海岸砂丘のキノコの命を保たせているようだ。マツ林を抜けると、初冬の九十九里の海の波音は高く、松に吹く風と天然のシンフォニーを奏でていた。

毎日新聞千葉支局長 愛波健



## inocolumn

キノコラム

聞き書き：須藤美智子 体験者：坂上貞子 紹介：小沼良子

皆様聞いて！ むかしむかし30年前のこと。場所は神奈川県西丹沢の沢登り中、椎茸にそっくりのきのこが沢山採れました。家に帰り、お隣に半分差し上げて、私、パパ、3歳の娘は、薄く切ってお吸物にして食べました。匂いもなく、味もよくありませんでした。そして、夜寝てから吐き気におそれ、娘と二人で、何回もトイレに通いました。パパはお酒を沢山飲んでいたせいでしょうか、大丈夫でべーべー寝てました。そしてトイレ行く途中、私は見たのです。台所の冷蔵庫の上に、山積みのきのこがぼーっと光を放っていたのです。「あっ」と息をのみ、気がついたのです。すぐ百科事典で調べたところ、「月夜たけ」という毒

キノコだったのです。よく見ると、真ん中の軸のところが中心からずれています。すぐお隣に電話しました。お隣は明日食べるつもりで、塩水に浸してあるとのこと。一安心でした。こわいキノコの思い出です。

お茶のお稽古で一緒に須藤さんが、「友人に光るキノコを食べて中毒した人がいる」とお稽古中に話して下さり、「ぜひ原稿を！」とお願いして、聞き書きしていただきました。ツキヨタケは味も香りもなく、気持ち悪くなつて吐き気におそわれるんですね。暗闇では幻想的な光を放ちとても美しいのに。(小沼)